



2005 年 (平成 17 年)
10 月号 (No. 725)

社団法人 日本山岳会
The Japanese Alpine Club

定価 1 部 150 円

URL ● <http://www.jac.or.jp>
e-mail ● jac-room@jac.or.jp

100周年を迎えた日本山岳会③ エヴェレストの南と北

宮下秀樹

一九五六年のマナスル初登頂以来、日本山岳会の最大目標は、エヴェレスト登頂であった。七〇年のネパール側からの日本人初登頂と、八〇年、開放後の中国側からの登頂を、当時の背景も含めて、宮下秀樹氏に綴ってもらった。

「世界の最高峰に日本人も登頂した」

各国の 8000m 峰初登頂の舞台に、56 年マナスルの初登頂によって、遅ればせながら日本もやっとスタートラインに立つことができた。山岳会では、59 年に若手を中心にヒマール・チュリに遠征を出したあと、今後どうするかいろ

いろと論議が重ねられた。

結局、エヴェレストに目標が定まった。63 年 5 月、許可の申請に三田幸夫副会長がインド、ネパールを訪問した。しかし、すでに 65 年春はインドに決定されていたので、やむなく目標を 66 年春に変更し、登山許可の内諾を得て登山料の半額をデポジットすることがで

目次

100周年を迎えた日本山岳会③	
エヴェレストの南と北……	1
歴代の会長が語る、日本山岳会のありかた……	4
渡辺兵力さん追悼の記……	6
100周年記念事業 会員並びに有志募金の御礼とご報告……	7
報告	
自然保護委員会/科学委員会/山の自然学研究会……	8
図書紹介……	10
東西南北	
草創期会員「田中喜左衛門の山日記」……	11
Climbing & Medicine……	12
図書受入報告……	12
会務報告……	13
ルーム日誌……	13
会員異動……	14
新入会員……	14
INFORMATION……	15

▶ 日本山岳会事務(含図書室)取扱時間
月・火・木 …… 10~20時
水・金 …… 13~20時
第2、第4土曜日 …… 閉室
第1、第3、第5土曜日 …… 10~18時

きた。53 年春の英国ハント隊の初登頂以後、各国が競ってモンストンをはさんだ春秋のシーズンに登山申請を続けていた。にもかかわらず、許可を入手できたのは、三田さんの幅広い人脈のおかげといえよう。

前記の「登りたい」という素直な感情は、当時の先輩達の偽らざる気持ちであった。国際的にみれば、日本は一代ぐらゐ遅れていたもので、一日も早く世界のレベルに到達したいと願っていた。当然、東南稜からのハント隊のアタックの記録が教本となり、徐々に準備が始まろうとしていた。

しかし、65 年 3 月、突如ネパール政府は、向こう 5 年間のネパール・ヒマラヤ全域の登山禁止を発表した。突然の発表に、関係者の

衝撃は甚だしかった。おりから我が国では、1 人 5000m の外貨自由枠が決定されたばかりであった。この機会に満を持して海外登山を試みようとしていた登山家たちは、やむなくヒンズークシユ、コーカサス、アンデス、ヨーロッパのパリエーションへと目標を変更せざるを得なかった。

68 年 8 月、ネパール政府は全面禁止の一部を解除し、新登山規則の成立を待って、エヴェレストを含む 38 座の解禁を発表した。うまくいけば、69 年春には登山隊派遣が可能となるので、エヴェレスト登山再開の気運が一気に高まった。しかし、この 4 年間の登山休止期間、登山界の変化には著しいものがあつた。53 年のエヴェレスト初登頂により、山登りの最大の夢



1970年5月11日9時35分、登頂の第1報を送る松浦輝夫隊員

のひとつが失われたと感じた世代には、高さを求めるより、より難しさを求める傾向が強くなっていた。

なぜ、今さらエヴェレストなのか、という疑問であった――。

エヴェレスト南壁（南西壁）の計画がいつ、誰から発案されたのかは定かではないが、少人数でのラッシュアタック、無酸素、頂上での幕営など奇抜な案も出ていた。すでに5ヶ国も登っている東南稜からの登頂に、一国の総力を懸

けるにはあまりに大袈裟、陳腐な計画であろう。反面、未知の南壁を攻略する力が我々にあるだろうか。世界最高峰のバリエーション・ルートを登れるのか、不安は増すばかりだった。

さらに、スキー隊との競合問題が発生した。今まで1山1隊を厳守してきたネパール政府が、エヴェレストのスキー滑降を撮る撮影隊に、同時期の入山許可を出したのである。両隊で運ぶ大量の物資、おそらく1500名を超えるポー

ターの動員、サポートしてくれるシェルパの人数と質などの問題が派生した。そして何よりも、あの危険度の高いウエスタン・クウムのアイスフォールを大勢の人が通過することなど、問題は複雑で深刻だった。

資金面では、毎日新聞やNHKなど、多くの企業から支援を受けることができ幸運だった。半面、同じ70年春に、マカルーに遠征する東海支部の人達には、多大な迷惑をかけることになってしまった。上層部の人達は、これらの対応に振り回されて時間を費やし、戦略を考える余裕もないほど、その苦悩は大変なものがあった。

69年の第一次と第二次偵察隊のあと、いよいよ70年春、本隊が松方三郎隊長以下30名の大部隊で出発した。

主目的とされた南壁登攀は8050mで断念したが、悲願の登頂は東南稜より2パーティ4名が成功した。一次隊の松浦輝夫、植村直己、二次隊の平林克敏、チョタレの4人である。

「日本人が初めて頂上に立った」、「ヒマラヤの大岩壁に挑戦した意欲」は、後世に残る確かな足跡で

ある。参加した隊員が、準備不足もあり、十分に計画を消化しきれないまま山に向かった感はあるが、大きな隊で登り、多くの知己を得た事は貴重な経験になったはずである。以後、それぞれに自分の進む道を再発見、再認識したに違いない。

ネパール・ヒマラヤ鉄の時代とまではやされた70年代も半ばを過ぎ、中国の文化大革命の嵐も終息を迎えようとした頃、各国の登山家はそろそろ中国登山の開放近しとみて、中国との接触を始めたしていた。

当会でも、中国からの訪日団があると、有力者目当てに何度も接触を試みた。体育関係の要人の場合には、西堀栄三郎会長にも出席を願った。しかし、要人の口からは「山は国境近くにあるから、スポーツ交流の最後だね」と何回も繰り返され、時には絶望的な気持ちになった。

78年の夏、突然、日中文化交流協会の村岡理事の訪問を受けた。中国と未交流のスポーツ団体の代表が訪中するが、山岳界では誰が代表にふさわしいかとの事だった。

即座に西堀会長がベストであると回答した。組織上からみれば、日本山岳協会の方がふさわしいのであろうが、未交流の場合は個人のパーソナリティーがものをいう国である。西堀さんの交渉能力の抜群さはすでにマナスルで実証されており、これは大正解であった。

旅先の北京大学では、飛び入りでご専門の話をされたり、非公式ながら体育総会との会談が設定され、登山協会の要人たちとも会見できた。これが、西側諸国で、我が国が開放後の一番乗りを果たす事ができた大きな要因であったと思う。しかしこの事は、後々まで日山協から恨まれた。

79年6月、待望のチョモランマ登山許可の内諾があり、7月に当会から渡辺兵力副会長と宮下、日山協から今井田研二郎・丹部節雄両氏、読売新聞と日本テレビの幹部が訪中した。当初から読売グループから全面的な支援を受け、とてもありがたかった。

初日の会談では「中国にはエヴェレスト峰など存在しない。あるのはチョモランマ峰だ」と強く主張され、カッコ書きでエヴェレストと呼称する許可を得るのに半日

も要した。何しろ西側諸国との初交渉でもあり、中国側は慎重な上にも慎重で、会議も国際部が主導、登山協会員は末席に座っているだけだった。

60年の中国隊の写真集を見て「チョモランマの顔はこの北壁だ。これなら登れる」と確信を持てたので、北壁登攀を提案した。

中国側は、氷壁登攀にはあまり実績がなかったもので、あのルートは不可能だと当初は取り合わなかった。後から続くであろう各国登山隊を思い浮かべながら、失敗は許されないと覚悟はしたが、周囲の勧めもあり、計画は北東稜（北稜）との2本立てとし、議定書に調印した。

ただ残念なことに、中国側からの情報提供は極端に少なく「過去に事故を起した事はない。ノース・コル側で雪崩は1度も起きていない」という程度のものであった。少ない情報を信用したばかりに、秋のノース・コル偵察時に雪崩に遭った。日本隊は負傷で済んだが、中国隊員3名を失ってしまった。70年のエヴェレスト隊の経験から、隊員選考では北東稜か北壁かの希望を聞き、誰とザイルを組み

たいのか、その気持ちを大切にしておいて決定された。隊は完全に2つに分け、それぞれ独立した隊として編成された。

80年2月、渡辺隊長以下北東稜13名、北壁12名の隊員が出発した。隊員の技術、経験は10年前と比較して格段の進歩をとげ、めざましい活躍が展開された。

北東稜では加藤保男が最後は単独で、北壁では重廣恒夫、尾崎隆が新ルートから登頂することができた。しかし両隊とも、登頂後酸



登山を終え、ベースキャンプで全員の記念撮影をした

素なしのビバークを強いられるほど過酷であった。テレビカメラを回し続けた中村進は、最後の100メートルで力尽きたものの、素晴らしき映像を撮ることができた。

北壁では残念ながら雪崩で宇部明君を失ってしまったのは、痛恨の極みであった。

開放第1号の栄誉を担った登山であったが、日本登山界の面目を保つことができて安堵した。二兎を狙って良かったと思っている。

大きな登山のあと脱力感にとらわれる事があるが、継続こそ大切であると、帰国前に北京で、ナムチャバルワ峰と、ボゴダ山群の5年間継続登山の申請をした。

両峰とも、公式な登山申請は世界で初めてであった。ナムチャバルワ峰は重廣たちが、ボゴダ山群は81年から鹿野勝彦たちが登山を展開し、それぞれに大きな成果を上げた。よき仲間を育てられたのは喜ばしい限りだ。

今後、いかなる登山が展開されるのか私には予測もつかないし、語る資格もない。ただ、経験や技術は一足飛びに発展するものではなく、常日頃の積み重ねによるものが大きいと思う。

歴代の会長が語る、日本山岳会のありかた

100周年を迎えた日本山岳会。歴代の会長に、在任当時の思い出と、今後の山岳会への抱負を語ってもらった。

ナムチャバルワ登頂と

山岳研究所建て替え

山田二郎



会員番号3473
慶應大学山岳部OB
在任1989～1993

私が会長を仰せつかった1989年から4年間の大仕事といえば、当時、未踏の最高峰であったナムチャバルワへの日中合同登山と、上高地の山研の建て替えであった。両者とも関係者の尽力によって仕上げる事ができたことは、忘れられない思い出である。

ナムチャバルワでは、大西宏君を雪崩事故で失ったことは痛恨の極みであるが、粘り強い隊員の協力でみごと初登頂に成功した。

また立派な山研も、多くの会員諸氏に利用されているし、自作の水力発電も、環境保全にかける会の一事業として誇るべきものであ

ろう。

2度にわたるナムチャバルワ遠征と山研の再建には莫大な資金が必要で、会長として心を痛めたものであった。しかし、これも会員各位の協力によってなんとか集めることができ、誠にありがたいことであった。

今年はいよいよ創立100周年を迎える。100年の間には会の草創期から、ピッケル、アイゼン、ザイルなどを使った近代登山技術の導入、マナスルの成功を導火線とした国内外での登山熱の高まりがあった。しかし近年は、目を蔽うばかりの学生山岳部の衰退と、対比的に女性を含む中年登山者の隆盛期を迎えようとしている。若手会員の育成も重要な課題だし、会の運営もこれまでのような英国型に加えて、ドイツやアメリカのように間口を広げたものも加えていくことが求められるのではないだろうか。

豊富な人材が大きな財産

村木潤次郎



会員番号3472
早稲田大学山岳部OB
在任1995～1997

10年前の10月、日本山岳会は創立90周年の式典を行なった。100周年の今年と同じように、同じ会場で盛大な催しであった。

そしてその翌年1996年には、マナスル登頂40周年を記念して、カトマンズで謝恩の会を開いた。ネパールの国と人に感謝の気持ちを表わすためのものである。最初の入国にあたって尽力してくれたクリシュナ・バハドル・ヴァルマ氏を名誉会員に推し、国王にもお目にかかり、お礼を述べる事ができた。これが縁となって、ポカラ山岳博物館の募金も始まった。これらのことは、多くの方のお力添えでできたことであるが、たまたま私が会長の時のことである。そして思うことは、それらの行事によって会が発展したり、急に会員が増えたりするわけではないということである。

会員として過ごした50数年を振り返ると、貧しくて会費がなかなか払えなかった20代、少し生意気だった30代、そして壮年から晩年を通じてこの会の魅力は、事業や組織の力だけではないと気づいたのである。横、松方、藤島、日高などの大先輩と、その裾野に広がる多くの先輩方に接することの楽しさと、厳しさをありがたく思い出すのである。たまたまマナスル計画があったことも大きな機縁ではあったが、その流れの中での体験が、その後の人生の大きな糧になったといえる。

華やかなイベントや、会員の増加など、経済効果ばかりが会の繁栄の証ではないように思えるのだが、いかがであろうか。

晩餐会と海外遠征

齋藤惇生



会員番号5373
京都大学山岳部OB
在任1997～1999

1997年の新入会員の平均年齢は56・57歳だった。これは、会

員の平均年齢とまったく同じで、以後の会員の高齢化が予測された。

97年には、支部創立50周年を福島、石川、山梨の各支部が、98年には富山が迎えた。97年11月、待望久しかった広島支部が誕生したのは大きな喜びであった。

97年晩餐会では、1925年に横有恒隊がアルバータ峰に初登頂した時、頂上に残したビッケルの上部と下部を、モータアカナダ山岳会会長と長野の原会員が壇上にてピッタリ合体させ、感動の拍手がわいた。

98年晩餐会では、秩父宮記念山岳賞の第1回授賞が行なわれた。薬師義美会員のヒマラヤ文献目録と、三枝礼子会員のネパール語辞典が選ばれた。

登山隊では、97年、東海支部のK2西壁の見事な初登攀、雪崩で撤退はしたが青年部のダウラギリ1峰のペアルートが、98年には無酸素・シエルパレスの青年部の野心的なカンチエンジュンガ挑戦があった。学生部は7人をブータンに派遣し、98年秋にはガンケル・ブンズムをチベット側より偵察した。

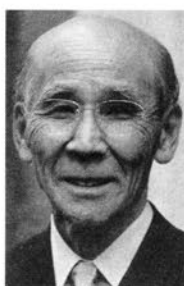
ネパールの国際山岳博物館の建

設支援に会員より多額の募金をお願いした。

会は100周年を迎えた。登山界の高齢化対策は必須のことだが、常に山に登ることで存在意識を持つ集団であることを、これからも忘れないようにしたい。

会長職を振り返って

大塚博美



会員番号3514
明治大学山岳部OB
在任1999～2003

1996年の青年部10大学によるK2登山、99年のガンケル・ブンズム登山計画頓挫後リヤンカン・カンリ代替登山実施に至る執行部内での幹部と若手との軋轢を背景として、私は会長に選出された。

私は会長就任以来、クラブサーバントとして全国の支部総会に参加し、できる限り多くの会員から生の声を聞くことに努めた。一方、100周年記念事業の土台作り、さらには若手の登山への取り組みを最大限尊重するよう腐心した。

創立100周年を迎える日本山岳会の歴史を振り返ると、登山歴の浅い中高年の会員数の増加など、かつてとは会を取り巻く環境が大きく異なってきた。どうすれば6000名の会員のニーズに応えられるか。また、次世代の登山界を担う若手の会離れを防ぎ、登山に対する熱意を支援する受け皿として用意することができるとか。

日本山岳会は、戦前の上流階級のサロンから、戦後の大学山岳部主体の登山活動、その後の大衆化へとその性質を変容させつつ、歴史を重ね伝統を構築してきた。

日本山岳会も社会の変化と無関係ではいられない以上、昨今の会の変容は不可避の事態であろう。

したがって、この流れにあらがうことなく、当面は「楽しいクラブライフ」の醸成に努めるしかあるまい。そのような中でも、若手の登山活動の支援に役立つことがあるのではないかと考えるのである。

100周年を迎えて

平山善吉(現会長)

日本山岳会の現状を見ると、その環境は社会の変化と共に大きく

変化している。特に、会員数の減少と高齢化には目を見張るものがある。しかしこれらの諸現象は、避けて通ることはできないだろう。そうした中で、ただ単に若返りとか、会員の増加とか、あるいはかつてのようなヒマラヤ高所登山というのは、議論としては楽しいかも知れないが、これだけが日本山岳会の目指す道ではないであろう。

かつてのような大規模な登山隊を派遣する時代は終わったと思う。会員の企画によるパイオニアとしての隊には大小を問わず、本会の持てるノウハウを提供したいと思っている。世界には、まだ未知の地域も未踏の頂も数多くある。

また、若者離れや、会員の減少に対しては、まだ具体的な対策も見あたらず、止めることは容易ではない。現状で精一杯頑張り、楽しい山登りを奨励し、活気に満ちた会であれば、必ず若者も、入会者も増えるだろうと考えている。

私は、この100周年の後に来る時代のために組織を改革して活性化を図り、次に、本会の本来の姿であるクラブライフを楽しめる楽しい会にしたいと思っている。

渡辺兵力名誉会長 追悼の記



2005年9月6日没
享年91歳

成蹊高校時代の渡辺兵力君

三枝守維

私と渡辺兵力君とは、小学校3年の2学期から高校を卒業するまで、7年制の成蹊高校で同じクラスで過ごした。彼はすでに小学校の時に小槍の頂上に立ち、スキーも2年生の時から始めているなど、尋常科（現中学）では山仲間の見貴分であった。

以下、山とスキーについてあまり知られていない事を記して、彼の山男の一端を紹介して偲びたいと思う。

昭和8年12月29日、高木正孝と二人で一ノ倉の奥壁に登り、帰りのルートを誤り、幽ノ沢の左俣で深夜、雪崩に襲われてしまった。

沢の下流に飛ばされたものの、奇跡的に助かったことを、ご存知の方は多いと思う。事はそのあとで起こった。3学期の始まった数日後、授業中に足の指先が痛み出し、相談を受けた。あれこれ話し合った後、慶応病院に入院した。原因は乾燥凍傷であった。二人が虹芝寮に辿り着いた時は、高木の足は変色し、すぐ雪で摩擦したが、渡辺の足には何ら異常は認められなかった。彼の靴は新品で、足は乾いていたからだ。私は乾燥凍傷の恐ろしさを初めて知った。このことは満州北部での兵隊の凍傷予防に大変役に立った。

これも多くの方がご承知の、渡辺、高本文一（正孝の兄）の一ノ倉沢滝沢登攀の後のことである。オーバーハングでザイルが引っかかり、上の高木が動けなくなった。

彼はハングの下まで登り、ザイルを直そうとした。その時、支点のピトンが抜けて、墜落、奇跡的にザイルが延び切る前に小さなテラスで止まり、無事登攀を続け、虹芝寮にもどった。これは入院した年の8月6日の事である。

翌朝、彼は背中が痛いと言い出し、様子を見ていたが回復しない

ので一緒に帰京し、すぐ病院に行くよう勧めたが、彼はまたかと洗っていた。その翌朝、「泳げば治るかもしれないから片瀬に行く」と電話があった。本当に大丈夫かと心配であった。夕方、再び電話があり、「痛くて泳ぐどころではないから、明日、慶応病院に行く」と言ってきた。彼は約1ヶ月入院し、退院後も年内はギブスを付けて通学していた。そして虹芝寮に翌10年1月4日に1泊で現われ、3月には重い荷を背負って、尾瀬ヶ原東電小屋の合宿に参加した。

小学校3年からの長いつき合いでスキーのこと、例えばシュナイダーのスキーを参考に好日山荘の海野治良さんと相談しながら、まだ日本には無かったスキーのエッジを付け、回転には靴の踵が上がない方がよい等と、いろいろと工夫したのも、彼が中心であった。こうしたことはどれも虹芝寮建設（昭和7年）の頃で、思い出はつきないが、兵力と言えば、いつも思いつくのはこの2件である。



渡辺兵力さんの想い出

磯野剛太

渡辺兵力さんとの出会いは、1975年の春、ナンダ・デヴィ登山隊の準備会が谷川岳の虹芝寮であった時である。勿論、兵力さんと高木正孝さんの、冬季一ノ倉沢二ルンゼからザッテル越えの登攀は、神話のように記憶していた。幽ノ沢大滝上にビバークして、雪崩とともに滑り下りてきたという幻想的な情景は、若干20歳の私だけでなく、谷川岳の冬季登攀を目指す者にとつての神話であった。

ナンダ・デヴィ登山隊長の鹿野勝彦さんは、兵力さんの東京大学の後輩、私は鹿野さんの高校の後輩であった。この登山隊は当時の登山界では珍しく、大学山岳部のOBと、第二次RCC系のクライマーが隊員として融合したものであった。明治大学炉辺会のホープであった長谷川良典さんと、高見和成さんなどという組み合わせは、想像できるものではなかった。森田勝、加藤保男、重廣恒夫、嶋満則といった強者を率いるにあたり、兵力さんを総隊長として担いだのは、アルピニズムを共感できたからとも言えそうである。

100周年記念事業 会員募金並びに有志募金の御礼とご報告(6)

募金委員会

左記の大学、企業、会員より募金をお寄せいただきました。大学名、企業名、お名前を掲載し御礼とさせていただきます。

1. 大学募金 (1校)

法政大学

2. 企業募金 (23社)

関西電力(株)、住友信託銀行(株)、三井住友銀行、住友生命保険相互会社、三井住友海上火災保険(株)、住友商事(株)、住友不動産(株)、住友重機械工業(株)、住友林業(株)、住友大阪セメント(株)、住友ベークライ

ト(株)、住友倉庫、住友ゴム工業(株)、日本電気(株)、住友電気工業(株)、住友金属鉱山(株)、住友化学(株)、住友金属工業(株)、日本板硝子(株)、住友軽金属工業(株)、鳥よしパーティ、加賀重量(有)、浜幼稚園

3. 有志募金および会員募金

5万円以上 (4名)

齊藤健一、早田道治、千石信夫、工藤文昭

3万円以上 (2名)

中世古直子、坂本観晃

1万円以上 (11名)

浅山貞郎、長岩嘉悦、大西康郎、石橋正美、米本隆夫、五月女進一、滝澤ちよ子、副島一義、上幸雄、茨木岳人、横山駒子

9千円 (23名)

岳峰会、篠田一郎、進藤昭、桑田結、小島守夫、八幡浩、佐々木皓人、高倉信孝、横田春雄、粕谷俊矩、茅野忠幸、桑原一郎、山本恭三郎、平井順子、舟根章、宮前庄三、林一美、宮崎清之、山田明美、小林三子、堅田政孝、川村利子、是枝平八郎

(敬称略、9月末現在)

今年もさげんで会いましょう

そしてこの仲間達は、毎年、兵力さん得意のスキー行を共にし、夜は、兵力さんの毒舌を聞くのを楽しみにしていた。

当時の体育会的な山登りに興味のなかった「大正人」兵力さんにとつて、この若い仲間達との交友は、登攀好きだった青春時代を呼び覚ますには十分だったようで、日本山岳会にも自ら復会し、その後の1980年のチョモランマ登山隊へと続いた。

残念ながらご本人は、神の峰ナンド・デヴィの現地には行けなかったが、その翌年初秋に、私は63歳の兵力さんとザイルを結び、加藤保男、梶正彦、小原俊という面々とともに、45年振りのニルンゼからザッテル越えをやった。

思わぬ大雷雨に広河原のテラスでビバークをし、兵力さん持参のブランデーで乾杯し、花火を打ち上げた楽しい一夜を、ついこの間のこのように思い出す。

17歳で仲間と山小屋を建設し、アルピニズムを追求することから小屋掃除のことまで、山登りの個人主義と自己責任を言い切れる、傍目にも幸せな兵力さんの生きざまだった。

山岳会100周年に、最も「価値自由な」山岳会らしい人が逝ってしまった。

渡辺兵力(1914~2005)

東京大学スキー山岳部OB。成蹊踏高会会員。1933年、谷川岳一ノ倉奥壁積雪期初登攀。56年、第1次南極観測隊に参加。63年、東大カラコルム登山隊に副隊長として参加。76年、日本山岳会ナンダ・デヴィ登山隊に総隊長として参画。80年、チョモランマ登山隊では、登山隊長として指揮をとる。

新・「世界の山旅・辺境の旅」シリーズ



国土交通大臣登録旅行業第490号/ (社)日本旅行業協会正会員 日本CFP協会会員
アルパインツアーサービス株式会社
〒105-0003 東京都港区西新橋1-12-1 西新橋1森ビル2F ☎03-3503-1911
大阪 ☎06-6444-3033 名古屋 ☎052-581-3211 福岡 ☎092-715-1557
e-mail: info@alpine-tour.com http://www.alpine-tour.com

報告

10月 Report

日本山岳会の各委員会、
同好会の活動報告です

自然保護委員会

自然保護委員会後援

フォーラム―N花巻・遠野

19年目を迎えるフォーラムは、
8月19日(金)～21日(日)、岩手県で開
催された(参加者125名)。

初日は、花巻農業高校の校庭に
移築された宮澤賢治の家に集合。
芝生の丘を舞台にした音楽と演劇
「おきなぐさ」(賢治作)を楽しんだ。

圧巻は農高生による「鹿踊り」。
激しい振りを繰り返す踊りだが、
かぶりものを脱いだ顔は、かわい
らしい女生徒たちだった。

夜、渡り温泉の宿で、松本浩男
氏による「柳田国男と父とのわか
わり」と題した講演があった。氏
の父・松本信廣(大名誉教授(故人
))は、大学山岳部時代に柳田国
男宅に講演依頼に訪れた。それが

縁となり、遠野へも同行した。後
に民俗学(柳田)から民族学(松
本)へと学風は変わっても、生涯
にわたりその師弟関係を持ち続け
たという。

2日目は、早池峰山登山(リー
ダー・地元森のアトリエ)、八幡平
散策(山の自然学研究会、遠野周
遊(フォーラムIN)と3班に分
かれて行動した。早池峰山への集
中を避け、体力、年齢に合わせて
うまく分散された。天候にも恵ま
れて、好評のうちに目的を達する
ことができた。

会食時には「森謡会」による東
北民謡の数々が披露された。メン
バーに東北出身者が多く、歌に懐
郷の思いが感じられた。にわか仕
立ての「大漁唄い込み」舞踊団も
繰り出して喝采を浴びた。

食後は、戦後この地で厳しい内



宮澤賢治ゆかりの花巻農高生による鹿踊り 撮影＝大山恭司

省の生活をおくった高村光太郎を
テーマに「光太郎の戦争詩と私」
と題して安在孝夫(詩人)氏に話
していただいた。最後は、東京イ
ンターアーツによる演奏。「あれが
阿多々羅山、あの光るのが阿武隈
川」(樹下の二人)を含む組曲「智
恵子抄」の熱唱に聴き入った。

3日目、緑濃い高村光太郎山荘
や、人で賑わう宮澤賢治記念館を
訪ね、童話村で開催中の市主催賢
治祭に参加協力した劇団芸協によ
る「注文の多い料理店」を観たあ
と散会した。

花巻市、遠野市はじめ地元の
方々と、各後援団体のご協力に感
謝します。
(近藤 緑)

科学委員会

気象講座「白馬岳と周辺 の夏山気象」

2001年夏(7月後半から8
月)から白馬山荘に常駐して、天
気相談を行なっている城所邦夫会
員に、白馬岳とその周辺の気象に
ついて話を聞いた。

日本海に低気圧や前線がある場
合、北緯45度の位置が目安となる。
これより北の場合は、その影響を
受けることは少なく、早朝より晴
れて日中はガスがかかるが、夕方
にはとれる。しかし、午後には時々
通り雷雨もある。

低気圧や前線が南に位置してい
る場合、太平洋高気圧の張り出し
が弱く、日本海の天気は良い。朝
は風が強く霧であるが、日中は晴
れ時々霧となる。このような天気
の状態は、東北南部の山にも共通
している。

発達した低気圧の東進や寒冷前
線の南下の場合、平地での予報は
曇りのことが多いが、白馬では西
よりの風が強く、終日霧と雨で、
時に雷雨を伴う。

低気圧や前線の通過後、山麓か
ら見ると稜線には雲がかかってい

るが、平地の天気はすでに回復している。それでも、山ではガスがとれず、回復は半日から1日遅れる。

雷雨については、寒冷前線通過時を除くと、ほとんどは通り雷雨である。雷雨の発生地域は①剣・立山方面、②志賀高原、長野盆地方面、③松本盆地方面に大別できる。白馬周辺に接近する雷雨はほとんどが①で、時に②もあるが、この場合は優勢となる。

太平洋高気圧の張り出しが強いと、朝夕は下界の雲海が発達し、日中は積雲に覆われ、晴れ時々霧となる。午後は、にわか雨や雷雨がある。日中の霧のかかり方は2種類で、黒部川からの霧は長く続く傾向にあるが、安曇野方面からの霧は時々かかる程度で、稜線付近では旗雲となって東方へ流れる。

太平洋高気圧の勢力が強いと、日本海方面の低気圧や前線は北上し、西よりの風が強く晴れとなり、黒部川方面への霧もかからない。

最後に、昨年7月31日から8月16日までの天気図と、雲の写真から天気図の動きが示された。その中で、降雨中に杓子、鏝、毛勝、能登半島などがいつもより大きく見

える天気不安定による「異常視界」が印象的であった。(7月21日に行なわれた講座より) (北野忠彦)

山の自然学研究会

立山薬師氷河地形調査山行

立山連峰の氷河地形を昨年に引き続き調査・研修し、自然への理解を深めるとして、今年は太郎平から山に入った。

太郎平尾根は登山道の荒廃はなはだしかったが(当会研究報告書第2号参照)、昨年、その補修が県によりなされた。何年かたつて植生が回復することを願う。

調査隊参加者6名は、薬師岳へ向かう。分岐から、愛知大の大量遭難で有名な東南稜を慎重に下る。薬師三大カールのひとつである南稜カールを観察するためである。

台風14号が近づいてはいたが、幸いにも天気恵まれ、薬師三大カールを観察することができた。

ここから地層帯がめまぐるしく変わる。重い荷物を担ぎ、地質図と岩石の記録写真を熱心に撮りながら、スゴ乗越小屋に着く。

越中沢岳を過ぎ、縦走も3日目となり、そろそろ疲れが出た頃、

鳶岳頂上に立つ。ここからは周氷河斜面の五色ヶ原も展望でき、氷河地形探勝の目的が達せられた。

4日目は台風の影響で雨となり、立山火山の大爆発跡に凄味を感じながら、岬々とした大岩の頂・岩屑の岩稜を急登降する。龍王岳から、なだらかな立山カール群を見たとときはほっとした。雨のため縦走登山は一ノ越で中止して、みくりが池温泉に下った。

3年間にわたる立山地域カール群の研修・北ア縦走の氷河地形探勝記等は、前述「研究報告書第5号」に発表の予定である。(船橋明)

日本山岳会創立百周年記念出版

日本全国四〇〇〇山の情報を網羅!

10月下旬刊行!!



予約受付中!

(会員割引あり)

新日本山岳誌

日本山岳会・責任編集

菊判(1992頁)上製/クロス装/カバー掛け/函入り 定価18,900円(税込)

択捉・国後など北方四島の山から、南西諸島の山々まで、日本全国の山に登った、撮った、調べた、そして書いた。日本山岳会の全国25支部約500名が総力をあけて編集執筆にあたった最新・最大の山岳百科が、ついに完成!

△ 推薦のことは △
日本山岳会二代会長高頭式氏による『日本山岳誌』から百年、山岳の現況を記述し後世に残すべく、百周年記念事業として本書ができました。

日本山岳会会長 平山 善吉

ナカニシヤ出版

〒606-8161 京都市左京区一乗寺木ノ本町15番地

Tel.075-723-0111 Fax.075-723-0095

URL <http://www.nakanishiya.co.jp/>



個人手配旅行から人気のトレックツアーやエクスペディションのアレンジまで。充実度が違う「旅」のプランニングをここが付けています。山旅などあらゆるジャンルを取り扱っています。お気軽にご連絡ください。



株式会社 アトラストレック

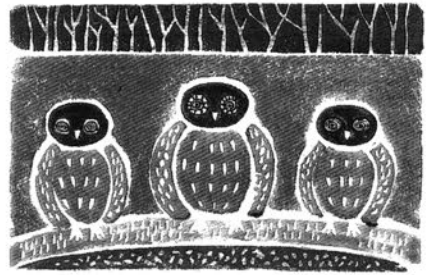
(国土交通大臣登録旅行業1167号)

東京/〒160-0008 東京都新宿区三栄町25 三栄ハウス202 TEL 03-3341-0030

大阪/〒540-0012 大阪府中央区谷町3-4-5 中央谷町ビル501号 TEL 06-6946-9111

名古屋/〒464-0807 名古屋区千種区東山通り5-113 オークラビル6F TEL 052-788-2422

図書紹介



幸せを呼ぶ鳥 版画・奥野溪石

日本山岳会医療委員会・編

『山の救急医療ハンドブック』

山で起きるケガや病気の現場での対処法



2005年7月刊
山と溪谷社
160頁
定価980円

日本山岳会創立100周年記念事業の一環として、医療委員会の編集した中高年登山者向けのハンドブックである。

この本のねらいは、①日本の山を歩く登山者の実態に即している。②医学的に正確な情報が実践的に

表現されている。③見やすく分かりやすい。④現場ですぐ使えるというもの。

特徴は、登山の現場で使うことを想定しているので、どこからでも読め、役に立つリストやデータ「緊急連絡先メモカード」などを掲載している。

第1章は山のケガ、第2章は山の病気、第3章は山行形態別山のケガと病気、第4章はセルフ・レスキュー、第5章は山行前の準備と章分けされている。

1章では擦り傷、切り傷、刺し傷、骨折、膝の関節痛など19項目について、治療の原則と応急処置の実践方法。

2章では風邪、熱中症、脱水症など16項目について、医学的解説とともに養生の仕方や応急処置法について。

3章では夏山の日焼けや雪山での低体温症、高山病などの対処方法。

4章では緊急度のチェック法、心肺蘇生の手順、止血法、気道確保、人工呼吸、心臓マッサージなど12項目がある。

5章には山に登る人たちの平素の心構え、トレーニング、テーピ

ングの方法などが書かれており、登山の初心に戻る良い機会を与えてくれる。

いずれも素人にも分かりやすいイラスト入りで、具体的な処置法を示している。ケガや急病人発生時に気が動転している場合でも、的確な応急処置ができる。

また、各章最後のコラムでは、骨粗しょう症、山での突然死と自己管理、パルスオキシメータ、自働体外式除細動器、生活習慣病と山、山で使える漢方薬などを解説している。索引があるのもうれしい。

登山者にとって、非常に心強いハンドブックである。事前にしっかりと熟読し、グループで応急処置などの実習にも役立つ。山では何が起こるかわからない。登山には必携の本である。(南井英弘)

大森義彦・著

『健康長寿登山』



2005年7月刊
東京新聞出版局
A5判 195頁
定価1680円

JAC会員の平均年齢が60歳を越えて久しい。誰もが、自分はいくつまで健康に登山ができるか、という不安を抱えていると思う。そんな時、ぜひ目を通してほしい1冊である。

登山は肉体的健康が第1である。健康維持のための、日々のトレーニングや食事対策など、広範囲にわたる高齢者へのアドバイスが随所に述べられている。

山でのケガや滑落防止としての日頃のトレーニング、若々しい歩き方、持久力・筋肉強化、効果のあるストレッチングの方法などを述べている。さらに、バランスの取れた食事やカルシウムを含んだ食品の摂取で、骨の強化を促している。「柔らかでかたい体をつくる」ためのトレーニング、老化のチェック、高血圧や糖尿病など、登山との関わり合いなどについても触れている。

トレーニングの挿絵にややペー지를割きすぎている感もあるが、著者としてトレーニングが大切であるとした意気込みは伝わってくる。横書きで参考資料も掲載されているが、一般読み物として気楽に読むこともできる。(林栄二)

草創期会員

「田中喜左衛門の山日記」

長田義則

黒部の秘境を探った二人に、東の冠松次郎（会員番号237）と、西の田中喜左衛門（会員番号146）がいた。

二まわりも年上の田中さんと、老恵の交わりを得た今西錦司さんは、『山と探検』の著書に「田中さん」の印象として、「講演はもとより、紀行も書かず、記録さえ発表しない頑固な人だった」と述べている。しかし、没後16年に田中家9代目の俊一さん（京大教授・仏文学専攻・1904〜92）から「翁の山日記」を見せられ、昭和34年

東 西 南 北



オオヒラウスユキソウ

イラスト・倉岡啓吉

会員の皆様のご意見、エッセイ、俳句、短歌、詩などを掲載するページです。どしどしご投稿ください。（紙面に限りがありますので、1点につき1000字程度をお願いします）

の『登山』7号に「田中さんの山日記」として新たな翁像を書いている（注1）。

黒部の他に特筆する山行記録等を左記に記載する。①1918年3月、徳本峠〜上高地〜蒲田の一本杖のスキー越え（注2）。②1925年3月、一本杖のスキーでの仙丈ヶ岳登山（積雪期初登頂）。③1930年8月、南アルプスの「寸又川廻行」（注3）。宇治長次郎にリードをさせた廻行では、地元ガイドの雄作沢の名を今に残している。④1932年7〜8月、AACCのカブルー挫折（資金は田中）により、変更して樺太へ29日間の初探検を行なう。

掲載の写真探しは、『会報』127号の菩提寺の福田寺（東寺の真東）への手紙となり、一念通じて田中家10代目の峻氏（翁の孫・67



田中喜左衛門（1877〜1943）

歳）に辿り着いた。氏のご好意は今西さんの見た「翁の山日記」、写真、一本杖でのスキーの映るビデオ（8ミリを再編集）等、貴重な資料を探し出し、提供して下さった。

翁の日記であるB6版ノート2冊は、31年間に44件の山行を数え、延べ日数382日の記録がびっしり詰まっています。年代順の目次が付された133項の山日記となっている。黒部の廻行では、川干ししてイワナ捕りに遊び、日程を気にしない悠々とした山旅が窺える。草創期会員の翁は、いつしか今西、西堀栄三郎、桑原武夫さんたちに引き込まれた山行も多く、後にAACCの名誉会員に推薦されている。

翁にかわいがられた桑原さんは、『京都における近代アルピニズムの曙』に関与した注目すべき民間の一人に、田中喜左衛門翁をあげ

ている（注4）。

（注1）朋文堂隔月雑誌、第9号で廃刊。今西全集に未収録。本会に所蔵。
（注2）一本杖はレルヒ少佐から中山再次郎へ伝授。中山、大丸社長、翁等が創設した関西スキー倶楽部の記録。
（注3）『山岳』26年2号に、同行の工業英司（20歳・京大山岳部）の寄稿あり。

（注4）『山岳』83年「京都における近代アルピニズムの曙」。「山岳」80年「対談 三高時代の思い出から」も参考図書。（文中敬称略）

（追記・田中峻氏より提供いただいた「翁の山日記」等の資料一式は、体裁を整えて本会に納めたい）

「上高地山研」年末年始のオープンについて 山研運営委員会

建物のメンテナンスのため、今年も年末年始に委員が山研に入ります。この期間は仮説トイレ、仮説の排水等を完備させてオープンしますので、会員の利用（宿泊）が可能です。

◆期間 17年12月30日〜18年1月3日まで
◆申込 11月末までに住所、氏名、会員番号、電話を明記し、坂本正智宛
(TEL & FAX 042-373-3238)

*申込者に利用の詳細を送ります。

Climbing & Medicine · 49

登山では 抗酸化サプリメントを摂りましょう 大野秀樹

『山』598号で、「高所登山にはビタミンEの服用を」と題したコラムを書きました。以来、高所に滞在するだけで酸化ストレスが高まるという報告が次々となされています。酸素が少ない所での活性酸素発生の亢進は、一見矛盾している現象のようですが、間違いのないようです。登山は、それに活性酸素の発生を亢進させる運動が加わるので、酸化ストレスの程度はより一層高まります。

高所トレーニングで体調を崩し、バルセロナオリンピック(1992年)で女子マラソン・小鴨由水選手が敗れたのは、高所の酸化ストレスによる肝機能障害が原因だった、と推測されています。高所での酸化ストレス亢進の原因として、①低酸素による白血球の増加と活発化(白血球は、自身で活性酸素を発生させて殺菌効果を示します) ②エネルギー代謝の亢進(最近、高所滞在が肥満治療に応用されています) ③紫外線量の増加(高度3000mで約50%増えます)

④昼夜の温度差の増大 ⑤全身の虚血——再環流(標高の高低、すなわち濃い酸素と薄い酸素を繰り返します) ⑥食事の質の低下や摂取量の減少、などが考えられます。これらに運動が加味されます。特に下山は、筋肉に最も酸化ストレスによるダメージを与える伸長性収縮(エクセントリック収縮)がおこるため、登山は宿命的に活性酸素の害を受ける、といえます。

高度を増すにつれて、活性酸素の影響は飛躍的に高まります(特に、高度約4000mを境として。しかし、小鴨選手がトレーニングを行なった2000~3000mの高さでも酸化ストレスは明らかに亢進します)。さらに、年齢を重ねるにつれて抗酸化能力が低下し、酸化ストレスの害を受けやすくなります。つまり、高齢者の高所登山は、酸化ストレスの立場からは要注意です。山で食事から十分な抗酸化物質を補うことは困難ですので、サプリメントによる補給を推奨します。活性酸素のターゲットは脂質ですので、脂溶性ビタミンのEを100mg、強い抗酸化能を有する茶カテキンを600mg、ビタミンE作用をサポートするビタミンCを1000mgが、標準的な摂取の1例です。登山中と、その前後1週間、毎日摂取します。これらは、高い安全性を有しますが、ビタミンCの単独摂取は、伸長性収縮の害をさらに助長することがありますので、お勧めできません。

図書受入報告 (2005年8~9月)

著 者	書 名	ページ・サイズ	出版元	出版年	寄贈/購入別
渡部由輝	永遠の未踏峰——人はなぜ山に登るのか	270pp/20cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
菊地俊朗	白馬岳の百年——近代登山発祥の地と最初の山小屋	237pp/19cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
唐仁原教久	雨のち晴れて、山日和——山で過ごす格別の時間	143pp/21cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
東京都山岳連盟	東京都の山(新・分県登山ガイド No.12)	135pp/21cm	山と溪谷社	2005	著者寄贈
楊南郡	幻の人類学者 森丑之助——台湾原住民の研究に捧げた生涯	301pp/20cm	風響社	2005	著者寄贈
暮しの手帖社(編)	わが山(再版)	283pp/20cm	碓井玉恵(私家版)	2005	発行者寄贈
遠藤甲太	父と子の多摩川探検隊——河口から水源へ	205pp/20cm	平凡社	2005	出版社寄贈
二階堂匡一朗(編著)	吾妻山回想譜 追録	109pp/26cm	二階堂匡一朗(私家版)	2005	著者寄贈
日本山岳会(編)	日本山岳会創立100周年記念 所蔵山岳図書・絵画展目録	79pp/21cm	日本山岳会	2005	当会発行
上村幹雄	わがエッセイと詩歌集(「片雲往来」総集編)	622pp/27cm	上村幹雄(私家版)	2005	著者寄贈
寺門寿明 他(編)	五十城文芸展(Bunsai Ioki)	207pp/26cm	東京ステーションギャラリー	2005	発行者寄贈
高澤光雄(編)	敬山愛林——「秀岳荘創業50周年記念誌」書信・書評集	47pp/21cm	秀岳荘	2005	発行者寄贈
堤信夫	全国解レスキューテクニク——登山者のための安全技術とセルフレスキュー	151pp/21cm	山と溪谷社	2005	出版社寄贈
山梨県立文学館(編)	山の文学展——日本人 美とこころのふりさと	72pp/30cm	山梨県立文学館	2005	発行者寄贈
伊藤正博	知床半島の山と沢	223pp/21cm	共同文化社	2005	著者寄贈
高橋信一	東北の避難小屋150 (完全ガイド)	150pp/21cm	随想舎	2005	著者寄贈
日本極地研究振興会(編)	南極大陸——財団法人日本極地研究振興会創設40周年記念	48pp/21cm	日本極地研究振興会	2004	平山善吉氏寄贈

会務報告

9月理事会

日時 9月14日18時30分～20時30分
場所 日本山岳会会議室

〔出席者〕 平山会長、平林・橋本各副会長、吉永・賛田各常務理事、石田・篠崎・大蔵・野口・斎藤・藤井・渡邊・石橋各理事、山本監事、小倉・重廣各常任評議員
〔委任〕 田邊副会長、古野理事、一力監事、今村常任評議員

【審議事項】

- 1 創立100周年記念事業関連
 - ① 募金状況 (17年8月末現在)
● 6152万6000円
 - ② 財務状況 (17年8月末現在)
● 総支出 20093万8007円
(寄付金支部還元金支払済)
● 17年9月繰越金 4059万5191円
 - ③ 式典・祝賀晩餐会について
式典委員会の神崎委員長より、10月15日の講演会・式典・祝賀晩餐会の会員と招待者の出席状況、次第、進行方法等についての詳細な説明があり、質疑が行なわれた。一部に未定の部分があるため、9

月中を別途に検討を加え、10月6日に会長、副会長出席の下で最終決定をすることとした。

④ 特別表彰・感謝状贈呈者について

平林副会長より、委員会において検討の結果2支部を表彰、2社、3個人に対し感謝状贈呈を行ないたい旨の提案があり、承認された。10月15日の式典において表彰・感謝状贈呈を行なう。 (承認)

2 ルーム交換と、これに伴う201・104号室の改装について

9月13日、201号室と104号室の交換契約を締結。これに伴い、現在賃借中の211号室については契約期間満了の10月14日に解約することとした。また、201号室には和室があるため、早急にこれを改装する。現在、211号室に収納中の物品・書籍を201号室に移し、今後、会議室としても利用することとした。改装工事は、9月27日～10月1日の予定なお、104号室は早急に設計を行ない、年内には会議室として改装予定。 (承認)

3 平成17年度名誉会員、永年会員について

● 名誉会員 小倉常任評議員より、

9月3日に開催の評議員会において、今年度名誉会員の推薦はなかった旨の報告があり、承認された。

● 永年会員 昭和30年4月～昭和31年3月入会の今年度永年会員は13名。10月15日の式典において顕彰することとした。

4 後援等

① ㈱NHKエンタープライズ↓所蔵映像等の2次使用願 (承認)

② 東京都山岳連盟↓第13回日本山岳耐久レースの名義後援 (承認)

③ 社日本山岳協会↓11月14日、オースポーツマンゴルフ大会への参加依頼 (希望者があれば参加)

④ ㈱山と溪谷社↓11月号 (10月15日発売)、日本山岳会創立100周年記念記事用写真の使用願 (承認)

【報告事項】

1 8月26日～27日開催、北海道ブロック式典 (会長)

2 9月1日開催、名誉会員を囲む会

● ルームで行なわれ、5名の名誉会員が出席された。

3 9月3日開催、評議員会

● 名誉会員の推薦等について

4 9月10日開催、支部長・支部事務局担当者会議

● 本年は創立100周年記念式典

当日の開催は困難なため、ルームで開催。会務報告、100周年記念式典の準備状況報告等があり、終了後、市ヶ谷アルカデアで懇親会を実施した。

5 契約↓東京神奈川森林管理署長「高尾の森」作業 (資材置場敷地の使用許可)

6 8月新入会員

新入会員6名、復活会員1名

【検討事項】

1 日本レスキュー協議会への参加 (山岳事故調査業務) について

「山岳事故調査」については有意義なものと認められるが、調査方法、保険会社との関係等について

不明な点があるため、次回担当者に説明を求めることとした。

ルーム日誌 9月

- 1日 名誉会員を囲む会 高尾の森実行委員会
- 3日 評議員会
- 5日 総務委員会 100周年記念募金委員会
- 6日 図書委員会 アルパインズケッチクラブ
- 7日 事業委員会 山岳地理クラ

30日	29日	28日	27日	26日	22日	21日	20日	17日	16日	15日	14日	13日	12日	10日	9日	8日
アルパインスキークラブ	緑爽会	山遊会 00会 九五会	03同期会 アルパインスキークラブ	常務理事会 ゆきわり会	100周年記念式典委員会	山水会 つくも会	自然保護委員会	美術クラブSUN燦会	総務委員会 フォトビデオクラブ	科学委員会	部	アルパインスケッチクラブ	100周年記念行事実行委員会	会議	支部長・支部事務局担当者	山の自然学研究会
							委員会 インターネット小委員会 中央分水嶺委員会	資料映像委員会 百年史委員会				山研運営委員会	アルパインスキークラブ			ブビールパーティー

物故	井上泰利 (10996) 05・7・5	三浦充哲 (10332) 05・7・17	横田和男 (12073) 05・7・27	渡辺兵力 (3029) 05・9・6	島中 丘 (11484) 05・9・11	退会	角田 健 (5755)	中村 進 (6743)	徳永恒夫 (12367) 関西
----	---------------------	----------------------	----------------------	--------------------	----------------------	----	-------------	-------------	-----------------

■会員異動(9月)

9月来室者 739名

「キリマンジャロ登山とサファリ」

アフリカ大陸最高峰をゆっくり登山。その後、キリマンジャロの麓でサファリ。

2月10日(金)～2月20日(月)
11日間 ¥548,000



Wec

株式会社ウェック・トレック
国土交通大臣登録旅行業 1662号

〒105-0003 東京都港区西新橋3-24-8 山内ビル4階
電話 03-3437-8848 E-mail info@everest.co.jp

INFORMATION



イラスト 宇都木慎一

◆第15回「山を語る」

図書委員会

霧ヶ峰の山小屋「ヒュッテ・ジャベル」のご主人に、この山の尽きせぬ魅力を語ってもらいます。

講師 高橋保夫会員

日時 11月17日(木)18時30分より講演、19時30分より講師を囲んで懇談

会場 集会室

◆スキー懇親会のご案内

事業委員会

恒例のスキー懇親会を左記の予定で開催します。詳細は次号でご案内します。

日時 1月7日(土)～9日(月)

場所 岩手県雫石スキー場

費用 2万3000円(予定)

定員 40名

現地集合・現地解散

◆「山に魅せられた画家達」モン

ベルクラブ巡回展

日本山岳画協会

山を愛し、山に魅せられ、自然の詩情を画布に託し描き続けている日本山岳画協会の会員、有志12名による作品約50点の展示。

■渋谷展

会期 11月15日(火)～27日(日)10時30分～21時

会場 モンベルクラブ渋谷店(渋谷区宇田川町11-5 モン

ベル渋谷ビル5階 TEL 03-5784-4005)

◆第3回明井克子油絵個展

近作「比良連山と仰木野」「甲斐駒」「八ヶ岳」など、山の絵を中心とした作品展。

会期 11月24日(木)～29日(火)11時～20時(最終日17時)

会場 プラムツリー・オフィス・ギャラリー(京都市左京区

岡崎)熊野神社東入る南側アンティーク家具ブル

1パロット3階 TEL 075-75213020)

◆100周年記念『所蔵山岳図

平成17年度「海外登山基金助成登山計画」募集 海外登山基金委員会

日本山岳会は登山界の活性化を目指して優れた海外登山計画に対して「海外登山基金」による助成を行なっています。17回目となる今回も、困難を求めている挑戦、発想の新しさ、夢多い計画などユニークな登山計画を支援したい、と考えています。

登山には多様なスタイルと発想があるはずです。パイオニア精神にあふれるさまざまなジャンルの計画であれば歓迎したいと考えます。会員資格や単独、パーティ等の条件は問いません。奮ってご応募ください。

- 対象 平成18年2月1日～19年1月末に海外の山へ出発する登山隊
- 申込方法 所定の様式(事務局に請求)に記入し、登山計画書(15通)を添える。
- 申込締切 平成17年12月31日
- 審査と助成期間 平成18年1月中旬に審査、2月の理事会で決定、助成。
- 助成金総額 160万円
- 問合せ・申込先 日本山岳会事務局 電話03-3261-4433

書・絵画展目録「頒布のご案内

さる10月8日から17日まで、丸善・丸の内本店ギャラリーで展示された出品目録(全ページカラー印刷)を、ご希望の会員にお分けします。

頒布価格(1部) 10000円

送料 1部290円(2部以上は問い合わせください)

申込先 日本山岳会事務局 図書目録係まで

◆編集後記

●日本山岳会創立100周年の記念式典、祝賀会も盛大に終わりました。準備に当たられた各委員会の方たちは、大変ご苦労様でした。当日、配布されました『写真で見える日本山岳会の100年』いかがでしたか。私もちよっとお手伝いさせていただきました。

(神長幹雄)

日本山岳会会報 山 725号

2005年(平成17年)10月20日発行

発行所 社団法人日本山岳会

〒102-0081

東京都千代田区四番町5-4

サンビュウハイツ四番町

TEL 東京(03)3261-4433

FAX 東京(03)3261-4441

発行者 日本山岳会会長 平山善吉

編集人 神長幹雄

Eメール:jac-kaiho@jac.or.jp

印刷 株式会社 双陽社